

ウェルフなる旅人の帰路

揚げやきとり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある旅人は、自らを狼であると言った。

ウエルフ。それがその者の名であって、どの街の住人もその名を知らなかった。

過去の記憶を求めて旅を続け、時に美食を探し、時に美術に触れ、ついには……。

旅を通し、旅人は「人間」の感情の深い部分を見るのだった。

毎週月曜更新・一部分投稿（前／後編）。

他サイトでも掲載しております。

感想は小説投稿サイト『カクヨム』への投稿のみ返信させて頂きません。

カクヨム

<https://kakuyomu.jp/works/1177354054886058189>

小説家になろう

<https://syosetu.com/usernovelm/anage/top/ncode/1247627/>
Pixiv

<https://www.pixiv.net/series.php?id=977207>

ハーメルン

https://syosetu.org/novel/16000

53 /

—

目次

Prologue	汽笛の響く谷間	1
一話前半	夢戻り、街踊り	4
一話後半	乱舞は静かに狂う	9
二話前編	隠れ岩の町、削れ岩の太刀	15
二話中編	削れ岩の尾踏まれ犬	22
二話後編	犬狩り狼	29
三話	茜色の息吹	38
四話前編	夕暮れの匂いのする街	46
とある街道での筆記		54
四話後編	雷鳴の刻、街道にて	57

Prologue 汽笛の響く谷間

「間もなく、汽笛の町モリ、汽笛の町モリ」

木の葉の形をした黄色の髪飾りを揺らし、黒色の乗務員服姿の少女が脇を通った。

きつとこの列車の乗務員さんなんだろうが、小柄だからか服が大きめに見える。

「……ん、もう着くのか。早いな」

自分で聞いても眠そうな声を窓の外に流して、自力でなんとか目を覚ます。

別に寝ていた訳ではないが、軽くうとうととしていたらしく目が痒くなっている。

「この列車も、もう少し揺れが柔らかかったらぐっすり寝られるんだけど……」

そんな声を洩らして目を擦ると、

「悪かったね、お客さん。どうも古い列車なもんで」

そんな声が聞こえて、目を開くとすぐに、さっきの少女が視界に入ってきた。

その顔は片方の口角が上がっていて、何だか皮肉を言いそうな顔だった。

柔らかそうな頬に華奢な体、小柄な背丈に伸ばした髪、それと綺麗で細い指。

外見からして幼い印象しか伝わってこないが、実際は何歳なんだろう。

「きみ、おいくつ？」

そう疑問に思ったので、とりあえず聞いてみた。

「……お客さん、どこから来たの？ 外見とかからして何処か遠くだと思うけど——」

「逆質問しないで。まずはこっちが先、でしょ」

上がった口角が更に上がった。

失礼だったかな？　とも思わなくもないけど、知りたかったものはしょうがない。

引く意思がない事を察したのか、少女は小さく息をはいて口を開く。

「私はローレ。ローレ・レランクル。本列車の客室点検主任と、あとは女乗務員の監督を任されていて、歳は……」

そこで言葉を切り、彼女が軽く顔をしかめる。初めて嫌そうな雰囲気を感じた彼女だったが、やむなしかと小さくため息を付き、少女は再び口を開いた。

「今度、12歳になるわ」

若い、という感想が思いついたが、自分は口を開かなかった。

この世界で言えば、12歳という歳で定職を持つ人間は珍しくもない。珍しくはないがその人数は多くもなく、家庭の事情で、とか、生活の事情で、だとか、いろいろな事情を抱えた人間が存在する。全体的に言ってしまうと、ませている。ともとれる。

しかし、この世界の人間は誰も。ませている。とは言わない。決して、言わない。

若い働き人の殆どが親を持たぬ事を、この世界の人間は知っている。

「12歳、かあ。残念、2つ違った」

「……ん？　何の話？」

小首を傾げて可愛らしく疑問の意を示した少女と、車窓から外の景色が見える。

周囲を高い山で囲まれて、列車は汽笛を上げながら谷間を進む。たにあい
「車掌さん、とっても綺麗な顔をしているから、14歳くらいかな、って思ってる」

そんな返しに驚いたのか、少女は少しの間だけ惚けてみせた。

「……まさか、年上に見てくれる人がいるとはね」

意識が戻ったのか、そうとだけ呟いて照れくさそうに顔を逸らす少女。

「女性ってのは、年下に見られる方が嬉しく感じるんじゃないの？」

少女は答えた。

「人間ってのは、若さの全盛期を常に追い求めるのさ。だろう？ お客さん？」

一話前半 夢戻り、街踊り

「ふあああ……きもちよかったあ」

ぐぐつと真上に伸びをして、雑多な鉄骨で組まれた天井を見上げた。

心地よい睡眠から目覚めた時の感覚には、とくに青空が似合う。偉い人を真似て粋な空想を浮かべた私は、金属の板の間から見える空に向けて目を閉じた。

先程まで乗っていた列車は終点に到着し、石で区切ったホームの間に停車した。

赤いレンガ壁の箱を倒したようなデザインの駅には3両の列車が到着していて、所々に設置されたドアからぞろぞろと乗客が顔を出してきていた。

列車の脇に描かれた、赤色の旗印の上から黄色い一つ星がはみ出たマーク。

列車のエンブレムか何かなのだろう。エンブレム自体もよく目立つように書かれている。かすれた木の葉色に塗られた列車にもよく似合っていた。

「おはよーさん、お客さん。ちよつとはぐつすり眠れたかね？」

「うん、おかげさまで。ふかふかの枕、ありがとね」

「いやいや、予備が余っていたから礼はいらないよ」

この清々しい目覚めも、この少女……もとい、一車掌さんから借りた枕あつてのこと。眠れない私の不満を聞いた彼女は、快くも良質な枕を貸してくれたのだ。

それらしい見返りは望めないと分かっているけど、彼女は乗客に良い旅を届けるため、彼女にできることをしてくれた。純粹なもてなしの態度が現れていると思った。

良心から滲んだ行動に、私はどんな美術作品をも凌駕する美しさを感じた。感情を伝えるのは苦手なので、心と言葉で感謝の言葉を呟く。ふんわりと着ていたコートを両腕で整える。しっかりと少女の目を見据えると、軽く笑みが浮かんだ。

「じゃあ、また」

「ああ。改札にはその跨線橋こせんきょうから行けるからね。……それと」
彼女は言葉を切り、何か言いたげな表情を浮かべたが。

「これからも、当列車をぐいひいきにね」

そうとだけ言葉を残して、少女はその小さな体で、

しかししやんとした足取りで、背景の列車へと戻っていった。

「そりやどうも」

礼儀として言葉を返し、私は示された跨線橋こせんきょうに向かった。

眼下に動き出した列車が見えて、私はひゆうと歓声を上げる。

人格からして、十二歳という歳が似付かわしくない少女。

親の有無は分からないが、決して立派な教育を受けた訳ではなさそうに見えた。未恐ろしいというか、身震いをするような才を感じたというか……。

ともかく、彼女は私に強い印象を与えたのだ。その印象が理由となり、私は彼女の事を忘れたくないと感じたのだが――

「……ああつ、あの枕の銘柄、聞くの忘れてた」

頭と口が別々に考えを持っているように、私はそんな情けない声を出した。

相変わらず物事を忘れがちな自分も、今だけはおかしく見えたが。

賑わいを見せる街は、道の両側を良い匂いのする露店で固めていた。

切符代わりに渡された銀色の板を持ち、そのまま駅員さんに渡して改札をくぐる。駅を出た先の下り階段を降りると、暗い色の木材で作られたゲートが一つ。改札から伸びる列に流されてゲートをくぐると、軽い騒がしさと共にその景色は開かれた。

「わああ、凄い……。いつぞやの商人街みたいに沢山、店が並んでる……」

駅から流れる人の波を集めるように、遠近法の景色の中に商店街が並んでいた。

安そうな材木の下で雑多な商品だいどうみせを売る大道店もあれば、立派な服を着た商人が切り盛りする商店まで見つける事ができた。

原木はらぎを組んで麻布まふを掛けたその商店には、特に大勢の客が集まっていたが、

個性的な外観を立ち並べた街中であつて、並べられた商品は全て強調きょうきょうされていた。

飲み水のみみづを売る店、なめした皮でできた製品せいひんを売る店、干し物を売る店に不思議な色をした水みづを売る店。紋章もんしょうを刻んだ盾たてを売る店もあれば、錆さびのない長剣ながけんを売る店も。

青色の香水かぐいだけを売る店の店主と、その向かいに陣取つた赤色の香水かぐいだけを売る店の店主が睨み合っている。片方の店に客が寄れば歓声かんせいが上がリ、離れれば嘲笑あざわらひの声こゑが上がつていた。

面白いけれど、実にくだらない。香水の色などどれも同じだと思つた。

そんな事を考えつつも、様々な品を扱う店に視線と歩みあしづみが奪さらわれてしまう。特徴とくちょうを前面ぜんめんに押し出した景観けいかんに目を輝きらかせていると、

「いらつしやい、その坊ちゃん！ ケトロ口名物干しヤモリ、買かつていきなよ！」

性格せいかくが良さそうな男おとこの声こゑがして、声こゑの主ぬしは私のことを笑顔えんごで見みていた。

周囲しゅういに興味きょうみを示ししていた事ことを感付かんとかれ、私わたしは声こゑを掛かけられてしまつた。

平気へいせいで変へんな名前なまえの変へんな物ものを進すすめる店みせは、他ほかにも何軒なんけんか立ち並ならんでいた。焼きバツタやきばつたをバターバターの香りかおりだとかいう説明せつめいで勧すすめてくる店みせから逃にれる為ためにも、私わたしはその声こゑを聞き取きつた。

呼よばれたならば仕方じかたがない。行いつてみる事ことにした。仕方じかたがないので。

「お、いいねいいね。見ていきな、聡明そうめいそうな顔かほの坊やんちゃん！」

「ごりやどうも。おじちゃんさつき『干しヤモリ』つて言いつていたけど、どういふ商品しやうひんなの？」

「ふふん、やはり気になるよね。流石は旅の坊ちゃん、目の付けどころが良い」

どこからそんな褒め言葉が湧くのか、少々疑問に思った。私はそんな感情から自然にじとつとした表情を浮かべてしまうが、この店の主人は気にせず紹介を続ける。

「我が店の看板商品は、さっきも言った通り『干しヤモリ』だ。がしかし、そのへんの藁わらを重ねて屋根を作って、ひっ捕まえたヤモリを釘打ちにして干した、なんてそんなつまんねえもんじゃねえ。玲瓏な瞳を持った坊ちゃんに似合う高貴な代物さ」

どこからそんな宣伝文句が湧くのか、またも疑問に思った。

しかし、件のヤモリ商人の流暢なそれは聞いていて悪くない。言いたいことがまとまっていて、一つの朗読劇を見ているような、そんな感じがした。見事だった。

「時は遡る事百二十年、一世紀と大人一人分くらい前の話だ。当時は列車も線路も引かれていなかったこの街は寂しく、それはそれは賑わいがなかった。特産品と呼べる物が無かったんだ。そんなわけでこんな辺境に来る人もおらず、ここは廃れていた」

「ふむふむ、なるほど？」

軽く合いの手を打ってみると、ヤモリ商人の顔に興奮が浮かんだ。なんだなんだと人が集まってくる気配がして視線を感じるが、それは商人の高談に勢いを付けた。

「もうだめだ、この街はお終いだ。そうどうせ、ああ、誰も訪れなくなり、住人は末代を迎え、地図からも忘れ去られるのだ。おいおい、おいおい。そう思い未来に咽び泣く皆の先祖様やその仲間たちは、だんだんと気力を失っていつてしまった」

「ほうほう。それでそれで？」

こつちの合いの手に言葉を区切り、ヤモリ商人は一度口を嚙む。

『おいおい、おいおい』と言った時の泣き真似といい見事な芸当だが、朗読劇の職に就かぬ所以ゆえんが気になった。

丁度、私が疑問を脳裏の脇に寄せた時だった。彼は右腕の拳を持ち上げ、口を開いた。

「そんな時だった。ある秋の哀愁が漂う季節の日だ。寂れきつたこの町に、とある旅の魔術師団が辿り着いたのだ。がしかしその魔導師団は疲弊していて、多くの者がこの町に至って刹那の時も経たずに倒れ、魔術師の先を行く者だけが弱りつつも立ち続けていた。そして、言った」

「わっ」

群衆がヤモリ商人の語りを聴こうとするあまり、商店の並ぶ広い道を埋め尽くしてしまっていた。どこから集まったのかは見当もつかない。

その景色に驚いた私は軽く歓声を上げてしまい、周囲の人から睨むような表情を送られてしまう。ヤモリ商人はその声が聞こえなかったように、そのまま続けた。

『龍蛇りゅうへびに緋の粉を振り、新緑色にぶちのある葉を裂いて練ったものと合わせ、それを軽く燻したものを、どうか恵んでくれないか』と、魔術師は言ったのさ」

ヤモリ商人の声により、間延びした歓声が一斉に強まった。

「緋の粉とは、赤くて小さなからし粒のこと。新緑色にぶちのある葉はそののまま。そして、先祖様方は驚いた。龍蛇りゅうへびそれこそが、そこらを這いまわっているだけの生物、ヤモリだったからだ！」

歓声は少し控えめで、先程までの勢いを十分に活用したものとは言えない。

しかしそれを理解していたヤモリ商人は、最後の一言を立派に言い切った。

「干したヤモリにからし粒と葉を詰めた、そう、これこそがかの魔術師が求めた物であり、古来より伝わる魔術師の秘薬、『龍蛇りゅうへびの花はな香』だ！ 燻した煙は痛みを癒し、上る香りは心を癒す。ぴりと広がる空気の辛味、一つ920バニという嗜好性はまさに大人の嗜み！ さあ、紳士淑女の通り人様方！ 寄ってけ見てけ、お一ついかがかな？」

一話後半 乱舞は静かに狂う

賑わいが散った街中で、先の賑わいの中心に座っていた男が指を折っていた。

「六、七……すげえ、八万バニも売れてるじゃねえか！」

木製の皿いっぱいに乗せられた硬貨の総数、計26枚。これが彼の手元にある稼ぎの内訳となり、彼はそれに笑みをこぼした。

この世界で流通している通貨は、バニと呼ばれる単位で価値を付けられている。

それぞれ、一、五、十、五十、百、五百、千、五千、一万バニの価値を持つ硬貨が独立機関により製造されており、型はもちろん製造行程さえも公開されていない。

「売れたのが九十匹だから、総額で……八万二千八百バニ！ こりやすげえ、すげえや！」

周囲の視線を気にもせず、自らの手取りを高らかに宣言する。

元気な子供のように喜ぶ彼には見えていなかったようで、私の声で存在に気が付いたように彼は顔を上げた。

「良い稼ぎになったみたいだね、おじちゃん」

「ああ、最初の坊ちゃんか！ 話を聞いてくれて助かったよ、これはあなたのお陰でもあるってもんさ！ いやはや、こんなに買って貰えるなんて……。ううう、祖父の遺言を信じて頑張った甲斐があつたつてもんだよ……っ！」

「そりゃ、どうもね。自分は別に聞いていただけだし、おじちゃんの客集めが上手かつたんだろうね」

泣くように顔を覆う彼を軽くないなし、私は話を戻す。

「それで、その干しイモリの話なんだけど」

しっかりと、無表情を貫くことを意識して。

「途中で話が逸れちゃったけど、それ一匹くれる？」

「ほ、ほ……ほんとうか!? ありがとう、ありがとうよ坊ちゃん！
ええと、一匹九百二十バニになるぜ」

「きゆうひやくと、にじゅう。よし、これでいい?」

「毎度ありっ！ ありがとな、素敵なお顔した坊ちゃん！」

「ああ。どうもね」

代金を渡して商品を受け取り、私は軽く会釈を返す。にへらと笑顔を浮かべた商人に見送られ、私は商店街を進んでゆく。

道を進む私の気分は、雑多な考えを抱くほど良いものではなかった。

歩数で百数歩ほど歩き、ここでよいかと思つて私は足を止める。

周囲を見渡すと、すぐ近くにある大道店ではガラス細工が売られていて、その二つ隣の大道店ではマッチが売られている事を示す看板が掲げられていた。

「いらっしやい。ガラス細工はいかがかな?」

まずは近場のガラス細工店の店前に移動し、目当てのガラス容器を探した。

私に気が付いたようで、ガラス細工商人が声を掛けてきた。灰色の無精髭ぶしやうひげを微笑みに歪ませた男だった。それ以上私は特徴を読み取るうとしなかった。

「ガラスのコップ、二つ頂戴ちやうだい」

「あいよ、二つで五百六十バニだよ」

「五百六十バニ、はい」

「はいどうも。丁度だね、またどうぞ」

宣伝文句のない、シンプルな会話だった。ヤモリ商人の数押し商売術とは打って変わって単純明快な会話、とても言おうか。

しかし私は新鮮な気分にもなれず、次の目標地点へと歩を進める。

「らっしやい。何かお探しかな、お嬢ちゃん?」

女鍛冶屋の作業服に似た服に身を覆い、褐色の肌をしたマッチ商店の商人が声を掛けてきた。口紅でも乗せているのかやけに赤い唇と

いい、何だか艶めかしい風貌の女性だった。

「……やっぱり、気付かれちゃう？」

「おっと、話は後だ、後。客じゃない奴とは駄弁だべらない主義なんでね」
お話はお金の後、ということらしい。商品を買わなければ聞きたい話も聞けないようなので、先程の発言については後々考える事にした。

まず手に入れるべきは、火を起こせる道具である。私の頭を埋め尽くすこの疑念を晴らさずして、どうして買い物が楽しめるだろう、と思つて私は決意を固めた。

「火を点けたいんだけど、マッチ二本でいくらくらいになる？」

褐色のマッチ商人は、店内を物色するように視線を動かす。なにやら「そごそ」と両腕を動かした後、ものの数秒とかからずはこちらを向き直した。

「小枝マッチで五バニ、枝マッチで十二バニ、ろう塗りマッチで三十バニ。どれも一本での値段なのと、それと……」

そこまで言い並べ、マッチ商人は足元から何か箱のようなものを取り出した。

「……それは？」

「確か『ライター』って名前の、オイルを燃料とした着火装置だ。東南の都市から来たつて商人が譲ってくれたんだ」

そう言つたマッチ商人は『ライター』の箱に横一直線に入った切り込みに触れ、そこから上半分の部分を引っ張つて箱を開けてみせた。

「……本当に、そんな箱で火が起こせるの？」

「最初は私もそう思つたさ。使つてみた私に言わせれば、これは物凄い画期的な機械だと言える。実際に使つてみれば、文明の利器と表しても過言じゃないと分かるよ」

「へえ。少し拝借してみても——」

私はライターなる箱に手を伸ばしたが、商人は間に手を入れてそれを遮つた。

「おつと待ちな。こいつを使うには燃料が必要だと言つただろ？ 買う可能性がある、つてんなら話は別だが」

「いくら？ そのライター、いくらで売ってくれる？」

多少食い気味な口調だったが、そこまで焦った様子も見せぬマツチ商人は口を開く。商売慣れしている、といったところだろうか。

「……七百。きっかり七百バニだ、それで売ろう」

「買う！ 買うから、どうやって使うのか見せて！」

「おいおい、七百バニだぞ？ おいそれと小さな嬢ちゃんが出せる額じゃ——」

話は早いに越したことはない。自身を自身で保つためにも、心の迷いは早急に晴らすべきだ。そんな自分でも意味の分からない事を考えつつ、

「これでいい？」

きっかり七百バニ分の硬貨をカウンターに付き出し、私は商人の顔を見据えた。

当のマツチ商人はというと、唾然としたように驚いた顔を浮かべていたが。

私は大通りの脇道へ入り、人影とそれらしき雰囲気がないことを確認する。

まずは先に手に入れた『干しヤモリ』を取り出し、

「えい」

私は軽く力を込めて、丁度半分くらいに分ける事を意識して裂いた。

「やっぱり、尾の奥までは詰められてないか」

尾が付いた方の半身ヤモリを持って中身を確認すると、ぱらぱらと赤からしの粉が付着してはいるが、緑色にぶちのついた葉は詰められていなかった。

そして取り出したるは、つい先程手に入れたばかりの『ライター』なる箱。

先の店で燃料となるオイルを入れてもらったので、後は火を点けるだけだ。

箱の側面に飛び出た、小さな金属の板。私はこの板を歯で噛み、そのまま口で軽く引つ張ると、板が箱から糸に繋がって離れた。

軽く顔から離してから、噛んだ板を一気に引く。金属が鳴らす高く鋭い音が響き、再び『ライター』を見ると、人差し指大の炎が橙色に燃えていた。

これこそが、マッチ商人が文明の利器と呼んだ機械『ライター』の力である。

糸を引いて歯車を回し、回った歯車をとある金属合金に擦り合わせ、飛び出た火花を火種に火を点ける。これがこの機械の大まかな仕組みだと聞いた。

引いた糸は機械に組み込まれたゼンマイに巻き取られるので、その糸を引きちぎってしまった限り、マッチを買うよりも長い間使えるらしい。……が、

さっぱり理解できなかった私に対し、マッチ商人の女性は『自動火打ち石』という『ライター』に代わる商品名案を教えてくれたのだった。

ヤモリの尾の方、ヤモリの中身に葉っぱが入っていない方に火をつけて、ガラスのコップにぽいと投げ込む。

ヤモリの頭の方、ぶち付きの葉っぱ入りヤモリの方にも火を付け、もう一つガラスのコップに投げ入れた。

「おおおお、黒い黒い」

どちらのコップに入れた半身ヤモリも同じように燃え、まさに煙と呼べるようなもやが立ち上る。真っ黒に染まった煙からは物が焼ける匂いがした。

「頃合いかな。ええと、何か手ごころな生き物は……あつ、いた」

近くの草むらをかき分けて、私は二匹の生物を見つけ出して捕まえる。この生物がどんな生物はさっぱり分からないが、かろうじて同種には見えた。

「奥に行かないようにね。熱いから」

コップを横に傾けて地面に置き、捕まえた二匹を両方のコップに一

匹づつ入れる。入れた瞬間に入り口を素手で塞ぎ、中に入った二匹の生物の退路を閉じた。

そして待つ事数十秒、私は頃合いを見て両手をコップから離す。

「……やっぱり、動かないか」

捕まえた当初は何か逃げようと動いていた、今はコップの中で煙を吸い込んでいる生物二匹。実験的に退路を作ってみたが、そのどちらとも動こうとしなかった。

「それじゃあ、これならどうかかな？」

私はコップの内側から動こうとしない二匹の胴体をつまみ、コップの入り口まで移動させる。掴んでいた胴体を離れた途端、二匹に動きが現れた。

葉を燻した方のコップにいた生物は、そのままコップの中へ戻り、葉を燻していない方にいた生物は、すぐ側の草むらへと逃げていった。

「やっぱり、そういうことか。……本体は干しヤモリと赤辛子を燻したもので、この葉は溶媒と似たようなものなんだろう」

干しヤモリ、もとい魔術師の秘薬と称した商品を売る、あの干しヤモリ商人。

彼はきつと、全てを知っている。知っている上で販売しているんだろう。だからこそ厄介で、この街をあれが救っていると考えると、誰も止められない。

「まさか、こんな町にまで薬物が出回っているとは。依存性もあるみたいだし、さぞかし儲かってるんだろうね？」

背後から、大柄な男が顔を出した。

二話前編 隠れ岩の町、削れ岩の太刀

喧騒のある街中を歩いた日の翌日、私は既視感のあるエンブレムを見つけた。赤色の旗印の上から、黄色い一つ星がはみ出たそれだ。

広い駅には汽笛が響き、到着した列車の煙突が煙をはいている。実にこの駅へ訪れたのは一日ぶりであり、まるで多忙な仕事人かのような旅の行く様に、私自身も苦笑いを隠せない。

もう少しゆつたりと出来れば良かったのだが。

列車が軽い汽笛を鳴らし、赤レンガ壁の駅から列車が離れてゆく。午前七時十分、きっかり出発時刻。外に崖が見える窓側の席に肘をつけて座っていた私は、脇の貫通扉かんつうとびらから現れた人影を見た。

「やあ。どうもね」

「また会ったね、お客さん。相変わらずなようで」

整った足取りに乗せて、黄色い葉っぱの髪飾りが揺れる。はりのある肌には笑顔が浮かんでいて、既視感のある動きでその歩みを止めた。

ローレ・レランクル、客室点検主任。十二歳という若さと共に、客室乗務員としての職業技能に熟達する女性。

体躯の大きさでも最早目立ってはいるが、小さな顔を飾る髪飾り、葉っぱ型のそれが特徴的で目に映る。特注品であろう乗務員服もよく似合っていた。

「その『相変わらず』って、相変わらず失礼ですね、って意味?」

少女は一瞬だけ呆気に取りられていたが、顔ににやりとした笑顔を浮かべた。

「いいえ、とんでもない。『相変わらず』健勝の事と見受けられました何よりでございます』でございます」

埃一つ付いていない服を撫で、完璧すぎる立ち姿を披露する少女。きつちりとした接客台詞もそうだが、最後の一言二言がくだけた感じを出していて小賢しい。

やはりこの子、天才なのでは？　と思つた私は、背中に走る冷たい汗のようなものを感じていた。

「してお客様、再度の本列車への搭乗につきまして、この上ない感謝の中大変失礼を申しますが……何か御心揺れでも？」

冗談めかしく調理された言葉をつき、少女が片頬かたほおを上げた。にやあと笑う顔は人形に似て美しく、幼い外見も相まって神秘的な雰囲気と呼ぶ。

きつとこの少女は“昨日の出来事”について、もう知らされたのだろう。

まるで茶化すような問いかけに対し、私は軽い笑みを浮かべて返した。

「分かっているくせに、イジワルだね」

「こりや失敬。……こんな物を渡されたから、何かあつたんだらうと思つてね」

少女が服の懐ふところから一つの茶封筒を取り出した。光で中身が透けず、何が書いているのかは分からない。

表面には黒い字で『指示項』と書かれていて、封筒の口は開いていなかった。

「まったく、どうして私に渡されたのか……。お客さんが乗っていた列車の乗務員だったってだけで、私は面倒事を押し付けられるような程関わってないはずなのにさ」

先程までの丁寧な口調と雰囲気は消え去り、少女が軽く溜息をついた。小さな手に握った茶封筒を放り投げる仕草からして、不満ありありの様子。

「それは悪い事をしたね。どうぞ、封筒は開けていいよ」

「……謝罪の念が薄い気がするけど、職務だから目を瞑るよ。じゃあ開けるからね」

そう言った少女は道側の客席、つまり私の横に座ってきた。

そこまで広くない椅子に二人が座る事になったが、そこまで狭くはならなかった。少女は封筒の口を裂いて書類を取り出し、読み始める。

「時刻は午後四時過ぎ、場所はケトロ口町大道店街って……お客さん、列車から降りてすぐやらかしたのかね？」

「ま、いろいろあってね」

空返事で返し、私は車窓から遠くの景色を眺めていた。

そんな私の態度を見た少女がじとつとした視線を向けてきた気がしたが、遠くの山で跳ねる兎を見ていた私は気にしない。

「それで、指示項に書かれている名前は『ウエルフ』なんだけど、お客さんの名前で合っているかな？」

「合ってるよ」

遠くの兎がぴよこぴよこ跳ねる姿が見える。目が良いと普段から便利なものだ。

「年齢は不詳、経歴も不詳、性別が男で知人もいない……よくこれで個人情報報の審問に通ったね、お客さん」

「嘘なんてついてなかったから、すんなりね。……あと」

言葉を切り、視線を車窓から少女の方に向けて口を開く。

「勝手に書かれたんだろうけど、私はお——」

そこまで口に出したところで、私は口を噤んだ。

蒼白を乗せた顔色を浮かべ、少女が口を開けて膠着する姿が見える。私が口を噤んだ理由はこれだった。

「ぎ、罪状は——暴力行為？」

私が昨日到着した町は、旅する商人の街ケトロ、という代名詞で呼

ばれている。

主だった交易品は簡単な干物から細工品まで、また食料から工芸品まで多岐に渡る。街には連日大勢の旅商人が訪れて店を構えるが、この町に住んでいて、なおかつ自身で作り上げた商品を売る店を出す人間も多い所が特徴的な町である。

主な品は、食品で言えば加工された魚肉や獣類の肉、またそれを焼いたもの、焼いて干したものが挙げられる。特に干物は長期保存が効くので出回りが良い。

干し魚、干し肉、貝の干し物の類、干し肉のうち火で焼くと強烈な香りを発するよう飼育された獣類の肉で獣類避けに使う物、そして干しヤモリなどが例である。

あの商人が売っていた“干しヤモリ”は、正確には商品名を“干しヤモリ”とは呼べない。そう、言うなればあれは“薬物”である。

人間の脳に影響を与えるため、有罪と裁かれて死刑となる人間、あるいは兵士などの持ち物としての所持もとい使用が許可されている薬物の一つ。

それがあのヤモリ商人が売っていた“干しヤモリ”であって、本当ならば所持する事すら許可されていない。

——もしも、その街が“町”であれば。

『バニ』という単位を持つ硬貨は、とある独立機関によって製造されている。

それと同じく、各国の法律を統一して決定しているのもこの独立機関である。その独立機関が書き上げた決まりの書の『法の書 十一項 薬物所持の禁止』という部分によって、全ての町において薬物の所持もとい使用は禁止されている。

あの『旅する商人の街ケトロ』は、正式には“町”とは書かれていない。単なる『旅商人の街』であり、公的には、普通の町に並ぶ商店街に似た物があるだけの街路の扱いをされている。『旅する商人の街ケトロ』が町として認定されるのは、まだ先なのだ。

ぶつちやけて言えば、あの町に法はない。言わば無法地帯ってこと

らしい。

「無法地帯なのに罪を問われるなんて、全くもっておかしいと思うんだけど」

「それが罪人の台詞かい、お客さん。まったく、何やらかしたのか……」

「またも車窓の外を眺めつつ、私はぶつくさと不平を洩らしていた。本当はもう少し長くゆったりと見て回るはずだったのに、一日でトンボ帰り……もとい“追放処分”に処されるとは何事だろう。」

「事のあらましはこうだ。いち、薬物の存在に気付いた私が怖い大人に絡まれた。に、私とその大人のうち片方を追い払い、片方に重症を負わせた。」

「さん、そんな現場が見つかって私は無法地帯なのに整備された裁判にかけてられた。よん、重症を負わせた大人はとある犯罪者チームの一人だった事が分かり、私は釈放された。」

「そして、ご。私の知らぬ所で何故か再判決が行われ、犯罪者とはいえ怪我が酷いものだったことで私は追放処分を食らった。」

「ははあ、荒事を起こした奴は町にはいらないうってことかね」
「その事のあらましを少女に伝えると、どこか嗤うような雰囲気です。少女が返した。」

「そーだろね、多分。正当防衛だつてのに有罪だし、事もあるうか非通知再判決とは流石無法地帯らしいや」

「町になる時の事を考えると、些細な荒事も起こしたくないってのはまあ理解できる。まだ町じゃない場所だし、行政機関がしっかりしている分凄いなと思うがね」

「そう言った後、少女は少し不満そうな声色で、」

「……あと、その無法地帯に列車を運んでいるのは私達なんだから」

「と呟いた。振り返って少女の表情を確認すると、不満そうに頬を膨らませていた。」

「そりゃ失敬、悪かったよ」

「いいや、そんなんじや許さないね。代わりにお客さん、色々と聞かせてよ。どうやって犯罪者に立ち向かったのか、とかさ」

よほど興味があるのか、私に澄んだ瞳を向けてくる少女。その視線は純粋な輝きに満ちていて、完璧に仕事をこなす乗務員には全く見えなかった。

「それはいいけど、そろそろ時間かな」

冷静な返答を返した私は、車窓の外を眺めていた。

線路を進む列車は大きなカーブを曲がる場所に差し掛かっており、列車の先頭車両である煙突付きの車両が見える。私はそれを眺めていた。

「時間って？ お客さん、何かあるのかい？」

私の冷静な声色を感じ取ったのか、同じく冷静な声で少女が聞いてきた。

少女の顔は確認していないが、声色から疑問の意が伝わる。

車窓から見える空には重たそうな雲が浮かんでいて、雨が降る寸前の天気だった。

朝の七時となればもう日が上がっている時刻だが、分厚く灰色の雲に覆われて辺りは暗い。お陰でこの列車に設置された照明が明るかった。

「列車はどれも、大きなカーブに差し掛かったら速度を落とす。だよね？」

現役で乗務員をやっている少女に聞くと、

「ああ、速度が過ぎ過ぎて脱線しないようにね。……それが何か？」

期待通りの答えが返ってきた。私は口を開く。

「とすると、運転手さんでもできるだけ速度を抑えようと慎重に行動する事になる。運転手の補佐をする人もそこまで多くない。それに、今日はこんなあいにくの天気で視界も悪いから……」

私と少女の間で緊迫する、少し湿り気のある空気。
そんな中でも事は唐突に、そして全て私の予想通りに動き出した。

全車両に向けて、そこそこ若い女性の声のアナウンスが入る。

「ぞ、賊襲ですっ！ 乗務員に従ってすみや——」

女性のアナウンスが途中で途切れ、車内に噛まれたような静寂が走る。

降り出した雨に雷鳴と共に、小さなその声が響いた。

「——にげ、て……」

二話中編 削れ岩の尾踏まれ犬

「ぞ、賊襲だつて!? 嘘だろっ!」

「何が起きたんです、乗務員さん!」

群れ羊の一つを弓で射たように、件のアナウンスくだんによつて車内は騒然とした不安に包まれた。

全ての車両に向けて放送されたアナウンスなのだから、他の車両でも同じような騒ぎが起きているのだろう。もつとも、私のすぐ脇に座る少女ローレは乗務員だ。騒ぎの頭は乗務員に向くので、この最後尾車両のやかましきは他の比ではない。

「皆様、落ち着いて……まずは降車準備を、手荷物をお纏めなさるよう——」

こちらでも慌てた様子の少女が、もとい乗務員ローレが職務に則つて指示を出す。乗客は集団であるが故に制御が難しいが、そこは乗務員の手腕を發揮して頂こう。

その間私かというと、最後尾の車両の更に最後尾、『列車渡り橋』とも呼ばれる列車外テラスへ繋がる扉を開こうと足を運んでいた。

「お、お客さん? 何をするつもりで……?」

乗務員ローレが心中の不安を吐露したような声で聞いてくる。無論飛び降りる訳ではない。

脇を抜ける景色は草原のように見えて、どうやら山の上を走っているようだった。なだらかな地面を深い谷が遮っている。

列車に撫でられて舞った風が吹き込み、列車の方から薄い動揺の声
が聞こえた。

「よっ、と」

最後尾のテラスを支えていた支柱を掴み、近くにあつた手すりに足を掛ける。

支柱を掴んで体を捻る。そのままくると登ると、列車の屋上が見えた。未だ列車の走行は続いているので、この手を離せば直ぐに羽はも挽もぎれ鳥になれる。

「おきや、お客さん!? 何をし——」

「ああ、大丈夫。もう降りるよ」

乗務員ローレが少女らしい高い悲鳴を発したところで、私は引き際を察した。こんなコトに時間を割く余裕はないし、恐怖は身を固くする。調理されるのは食肉だけで十分だし、などと無駄な考えを思い浮かべた。

テラスに降りて、両手を上げて降参のポーズを見せつつ、列車に戻ることにした。

「みんな、落ち着いて。何かあったみたいだけど、こんな時こそ慌てないこと」

車内の空気は固まっていた。驚愕が成したのか、未知への畏怖がそうしたのか、乗客の顔には濃い不安の色が浮かんでいる。

だが、私も旅人のはしくれ。旅の荒事は隣室の客に同じ、無論黙って死にたいとは思わない。なので、まずは私が先導を切ることにした。

「まずは、ノーレ。君はまず乗客の頭数を確認した方が良いよね」

「ああ、確かに。皆様、今から乗務員がお客様とそれのお連れ様の人数を聞きに参りますので、荷物をまとめつつお待ち頂けるよう——」

狭い列車の中を、乗務員ノーレが歩いて進んでゆく。その姿が列車の中央に差し掛かったところで、私は口を開いた。

「さて、私はこれから前の車両を見に行くんだけど……か弱い子供に付いてきてくれる、勇気ある大人はいないかな？」

「マキ・ゲルルだ。職業はトンネル掘り、性別は男。聞いたまんま呼び捨てでいい」

筋肉質で頑丈そうな胴体から、これまた立派な腕と足が伸びた、という体躯をした男性。自らをマキ・ゲルルと名乗った人間は、そう表現できる姿をしていた。

「武器と言えるかは謎だが、相棒のシヨベルは持って行かせてもらう」

どこから取り出したのか大きなシヨベルを取り出し、彼は高く持ち上げて見せた。

「マキ、そのシヨベルの名前は？」

軽いジョークをかけると、彼は苦笑を浮かべて返答した。

「“凄い掘れるシヨベル”君だ。仲良くしろよ、坊主。——つか、できればもう片方の名前で呼んでくれ」

「エンヴといいます。……旅医師をしています」

白衣に煤汚れの付いた服を着た男性が、脚の脇に四角いバッグを置いて口を開いた。目の下にはくまが浮き、医師なのに不健康そうな外見である。猫背や右手の震えもそうだ。が、何より鞆の中身が気になった。

「よろしく、エンヴ。怪我人を見つけたらお願いね」

そう声を掛けると、充血した目が私を睨むように細められる。軽く不気味だった。

「……はい」

彼ら二人こそが、私の元に集まった仲間である。思ったよりは少ないが、私は空に頷いて口を開く。

「さて、お二人共。私からの注意点は二つだ。二回は言わないからね」
相手は集まってくれた二人、掘り師ゲルと医師エンヴだ。荷物も軽くして来たようで肩が軽く上がっている。まさに突入寸前、といった雰囲気だった。

「じゃあ言うね。——ひとつ、突入は自己責任。皆で一気に突入するのはナシってこと。そしてふたつ、命も自己責任。救う命、奪う命、それぞれがそれぞれを決めること。いいかい？」

私が簡単に注意を述べると、二人は軽く頷きを返した。エンヴは依然として不満そうに見えたが、反論はない。

「じゃ、それで。行こうか、“死にたがり”諸君」

私が言った。

「ははは、とことんうるせえ坊主だな。俺はまだ死にたくねえよってんだ」

ゲルが返す。

「……私も、死にたくありません」
エンヴがぼそりと口を開いた。

「それでよ坊主、聞きたかったんだが」

私が準備を整えて戻ると、ゲルルが聞いてきた。

「お前、男だよな？　なのに一人称が“私”ってどういう事だよ？」

「それさ、私も聞きたかったんだよ、お客さん」

「うおっ!?　なんだ、乗務員の嬢ちゃんかよ。驚かせやがって」

掘り師ゲルルの巨体の脇から、確認戻りの乗務員ノーレの姿が現れた。

別に隠すことでもないし、彼はこの後は生死を共にするやもしれぬ仲間だったので、私は教える事にした。

「自己紹介がまだだったね。私の名前は“ウエルフ”。職ナシ旅人兼、旅狩人。今は軽いお尋ね者。——そして、私は狼おおかみ。性別は“雌”めす」

最初の車両は七号車、代わり映えせぬ焦げ茶色の車内が続く。

「何も起きていない」

七号車の乗客はそう言った。仲間を募るが名乗りはない。灯油のランプを借りた。

次の車両は六号車、代わり映えせぬ怯えた雰囲気が続く。

「二号車は前半分が石炭庫」

六号車では情報を手に入れた。仲間は同じく名乗り出ない。そのまま通過した。

五号車、怒鳴る声が聞こえたような気がし

「ねえエンヴ、何を書いているの？」

五号車の壁に横顔を近づけたゲルルの脇で、私は小声を意識して口を開いた。

「……メモを取っていた。何があったのか、忘れても困るから」

ここは六号車と五号車の間、貫通扉はぎまの部分。三人で列車の間に立つのは難しいので、掘り師ゲルルに聞き耳を立てて貰っている所だ。

医師エンヴの手にはメモ用紙とペンが握られていた。落とさないよう慎重にインクを握るエンヴだったが、メモに書かれた文字はふにやふにやになっている。車内の揺れはまだ健在だった。

「駄目だな、こりゃ。外の風で何を話してるのかさっぱりだ」

聞き耳を立てていたゲルルは、少し経ってから後頭部を掻きつつ戻ってきた。

列車の外の景色は今だ濃い雲に覆われていた。風も勢いよく吹いていて、窓の無い貫通扉の間にあるのは列車を繋ぐ橋だけだ。

「ん、了解。じゃあ私が入ってみるよ」

そんなゲルルだったが、私が突入の意を示すと驚いたように目を丸くした。

「大丈夫か……？ 別にいいんだぞ？ 二人はここで待つてくれれば、俺が——」

「いいや、私が行く。その巨体じゃすぐに見つかる。二人こそここで待つていて」

私の強い反論に対し、ゲルルは複雑な顔をしていた。

「入ったら、三分経つまで開けちゃダメ。お願いね」

そうとだけ残し、私は列車の間にある橋を渡った。すぐに五号車の貫通扉の前に辿り着き、扉を静かに開ける。急いで車内に入り脇の座席に飛び込んだが、風の音は誤魔化せなかった。

「誰だッ……!?!」

布にこもった声が聞こえた。乱暴な口調から、怯えた乗客とは違う者である事がはつきり理解できた。

「鼠が入り込んだかもな。見てこい」

布にこもった声、それも先程とは違う声が聞こえた。同じく怯えた声ではない声であり、その声は薄い殺意を帯びていた。

——私は、彼らが賊の者達であると予想した。

心臓の鼓動が速くなった気がして、自分の頭に響く鼓動音に疑問を覚える。緊張していることは紛れもないが、この拍動の原因は恐怖か、それとも。

しかし、このまま客席の脇の床に座っているだけでは見つかってしまう。どこに隠れようかと考えるが、客席の下以外に隠られる場所がない。拍動は更に加速する。

私の耳に搜索者の足音が響く。ゆっくりと、しかし等間隔に響く音。搜索者の靴の靴底は固い素材らしい高音を鳴らして近付いてくる。

車両の一番後ろまで三席、二席、そして残り一席の場所に近づき、追跡者の足音は止まった。

「どうだ、鼠はいたか？」

車両の前方から声が聞こえる。もう一人の賊が殺意を帯びた声で聞いたのだ。

「……いや」

搜索者の賊がそう答え、またも足音が響き始めた。今度は間隔が短く、私の心臓は拍動の間隔を落とす。

と、次の瞬間。

「あ」

短い言葉、先ほどの搜索者の声だったが、私の心臓の拍動を再加速させるには十分すぎる言葉だった。

「どうした？ 何か見つけたのか？」

「待て、これ……」

響く声はすぐ傍から聞こえる。服の裾がはみ出ていないか気になるが、身動きなど取れたものではなかった。

汗が顔を撫でて落ちる。背筋は凍ったように冷え、頭に供給される

血液は逆に加熱されていく。鳥肌が全身を走った。

「——いや、なんでもない。鳥の羽が落ちていた」

「……遊ぶなよ、ゴドレ」

安堵の風が全身を包んだ。恐怖の戦慄が頭を過ぎ去り、野性的な快感衝動をも感じていたが、すぐに私の耳は次の音を感じ取った。

「動くなッ！ 二人共、乗客の命が惜しければ両手を上げて動くなッ！」

「やべ、見つかったしまった」

「嘘でしょうっ!？」

この声は聞き覚えがある。……ゲルルとエンヴ。まさか二人共突入して、二人共見つかってしまうとは。

「よし、そのまま進んで来い」

殺意のこもった声が聞こえ、今度は足音が二つ。私は無意識に苦笑していたが、後になって笑みだけが消える事になる事を、私は知らない。

「こりゃひどい……ゲルルさんが行くこうって言うか——」

医師エンヴの声は、そこで途切れた。

二話後編 犬狩り狼

薄い血の匂いがした。出所は予想が付いていた。

「あああつ、エンヴツ！ よくもエンヴを殺し——」

掘り師ゲルルの声が聞こえた。それも、私の「目の前で」。

「ゲルル、誰が下手な芝居をしると？」

真ん中の通路にしつかり立ち、私は三人を見つめていた。

「ありやあ……嬢ちゃん、出て来ちゃったか」

余裕に塗れた口調でゲルルが言う。

出会った時の清々しい笑顔は、ねっとりとして不快な笑みに変わっていた。

じつとり暗い空に囲まれて、私と、ゲルルを含む三人の男達は対峙していた。

男達の足元には白衣姿の男性が倒れている。かつて彼はエンヴと呼ばれていた。

ここは、とある列車の五番目の客車。少し前に賊に襲われ、ここ五号車に賊がいる事を確認したのはつい先程。

私が先に五号車に乗り込み、後から掘り師ゲルルと医師エンヴが突入し、見つかった。その後エンヴの言葉が途切れ、打撃音と共に転倒。未だ起き上がる気配がない。

倒れたエンヴの傍に立ち、賊らに背を向けて私に対峙する人間の名は掘り師ゲルル。その手に握られているのは先の尖ったシャベル。つまり——

「っははははは！ ゲルル、ああ、ゲルル！ 君は裏切り者だったんだね！」

全身の血が火柱で打たれたように膨張する感覚。脳裏に焼き付いた自らの意志は、残忍で凄惨な行動を嬉々として行える力を持っていた。

現状を冷静に整理しようとしたことで、私の狂喜を止める門が力を失った。獣と戦士が戦う闘技場にあつて、門が開かれた獣は立ち止まれない。

「たわけ、誰が裏切り者だ。俺は元々賊側の人間でお前の仲間じゃねえ」

ゲルルが答える。見下すように流される視線は私の瞳を射ていた。皮肉にも、私を含めた四人は全員が笑みを浮かべていた。

「それに、嬢ちゃん。あんたは言ったよな？」
「それも、ゲルルが口を開いた。」

「命は自己責任だ」、つてな」

私は上着の右袖の先を探り、止まっていた小さなポーチのピンを外した。

右肘のあたりに重さが落ち、腕を下ろすと「それ」は手のひらへ落ちてきてくれた。

「ああ——言ったね！　そうさ、決断と同じように、命は自己責任なのだからね」

私がそう言いつつ左足を一歩分出すと、ゲルルは軽く目を見開いた。

「驚いた、まさか向かってくる勇氣があるとは」

「その殉職？　医者と同じく、私も賊狩りに付いて来た人間なものでね」

そう呟き、私の右手に落ちた重みを握りしめる。ごつごつした形状の球体、これが私の武器であることを肌で感じた。文字通り。

「じゃあ——何故、立ち向かう？　そのまま泣いて逃げればいいだろ、嬢ちゃん？」

にたあと開かれた笑みは邪悪な感情を伝えている。賊らしい「情
けを与えるつもりのない」目をしていた。

私は右手から球体を離し、代わりに降りてきた「鎖」を掴む。そし
て口を開いた。

「ゲルル、私は言ったよね？　　『命は自己責任だ』、『決断と同じよう
に』——ってね」

ああ、大きく切られてよく煮込まれた羊肉が食べたい。
自らをかるうじて人たらしめていたのは、そんな願望の念だった。

倒れた人影は四つ。ゲルルを含め賊が三人、そして医師エンヴの姿
があった。彼はもう遺体になってしまったのか、確かな事は分からな
い。

見たところ、賊の持っていた武器は腕の長さの剣（けん）が二本と——先が
剣のように尖ったシャベルが一本。シャベルには拳の大きさほどの
凹みが幾つも残っている。

本来ならばエンヴが生死を確認するはずだった。鼠捕り（ねずみ）が鼠（ねずみ）に噛
まれてしまったなら、私としては、毒が体に回り切らぬ事を祈るしか
ない。

「まさか、一日連続で世話になるとはね。サプレサ」

右袖から垂れた「鎖」。その先には片手で握れるくらいの鉄球が
結ばれている。

これが私の相棒、そして武器。名前は「サプレサ」。語の意味は「
抑える者」。

「お疲れ様。よくやってくれた」

地に落ちた鉄球を掴み、大きさに反して重量のあるそれを右袖の
ポーチへ戻す。まるで動くことを拒むような重量には仕掛けがある

のだが、まずは先を見る事にした。

医師エンヴの足元に倒れたランプを拾い上げ、私は歩みを進める。目指すは客車の前方、人質に取られていた客達の下へ。

「お前は——賊の人間か？」

怯えた中年の男性が問うた。

「いいえ、私はただの乗客ですよ。道を開けて下さいませんか？」

私はそれに要求を伝え、客衆の間に開いた道を進む。すると突然、

「待て、坊ちゃん。……この先には、何が待っているか分からない。危険だ」

そう声がして、肩にくたびれた手が当てられた。声は震えており、悪意は感じられない。

「忠告^{あいにく}どうも。生憎^{あいにく}私は雌^{めす}なもんで、坊ちゃんって呼び方は変だけど

——」
私が振り返ると、多くの目がこちらに向いていた。

「生憎^{あいにく}と、怪我人の介抱は専門外でね。私は“賊狩り”の役に徹するよ」

「気をつける、残る賊はきつと手練れだ。乗り込んできた奴らの目は相当だった」

「整った髭姿の男性が言った。

「私としてはもう降りたいんだけど……ともかく、忠告に誠実な感謝を」

私がそう返す。すると、男の脇から彼の一回りほど小さな人影が現れた。

「おに……お姉、さん」

現れた人影は、年若そうな少女の姿をしていた。同じ車両に乗り合わせていた乗務員、ローレ・レランクルを思い浮かべたのは言わずもがな。

私は軽く膝を曲げ、目線を合わせて口を開く。

「なあに？ 私は少し忙しいから、名前と要件だけ教えてくれるかな？」

愛想のかけらもないというか、ぶつきらぼうというか。酷い返答だった。

しかしこれが私、旅人ウエルフという人間の性格だ。

「私の名前はリサ」

「リサちゃんね。で、私に何の用？」

ここまでは、私の目の色は普通だった。

「……そこに倒れてる、怖いお兄さん達が話してたこと、私聞いてたの」

ここで私の目の色が変わる。そんな自覚があった。

「なに？ その怖い武器を持ったお兄さん達はなんて言ってたの？」

武器が怖いのか、武器を持ったお兄さんなのかもはつきりしない言葉を返す。

少女は一瞬だけ呆気を浮かべ、口を開く。

「あの人、私に『あ、小娘！』って言って、したらもう一人のお兄さんが『職服じゃねえだろ、遊ぶんじゃね！』って」

言葉の節々が不思議な発音になっているが、私はリサという客少女の言葉に様々な感情を覚えた。

一人は、この少女に向かって感嘆符を浮かべた。

まるでこの子と面識があるか、この子の存在を知っていたように。もう一人は、賊仲間に指摘した。その内容は“何かが職服でない”

こと。

そして後に“遊ぶな”または“遊ぶのでは”という意味の言葉をはいた。

「遊ぶ……？ あれ、どこかで——あつ」

遡ること少し前、ここ五号車へ突入して身を隠していた時。

一人の賊が鳥の羽を見つけたと言って、もう一人は何と言ったか？
こう言っていたはずだ。

『……遊ぶなよ、ゴドレ』

疑問の余地はあるものの、私の仮定はある程度の根拠を手に入れた。

「そうか、そうだったのか！ 片方は『あ、小娘がいた！』と言い、片方は『服装が職服ではないだろ、遊んでないで仕事しろ』、と言った！
つまり——」

私は息が苦しくなってしまう、言葉を切った。

脇に居た乗客が「あ」という短い声を発した事に私は気が付かない。
私は推論の結末を言い放った。

「仕事服を着た女性、しかも小柄で歳若い人！ それが賊の探し人だ
！」

「——え？」

間の抜けた声はやっと、私にその存在を伝えた。

風の音が聞こえたのは、私が推論を語り終えた後となった。

振り返る。

視界には車内の景色が映り、後ろの車両に繋がる扉が開いている。

開いた扉に人影が一つ。間の抜けた顔をして右足を前に出して
て――

「歳若く、小柄で、仕事服姿で、女性」。

「いたーッ！ あいつが賊にいう小娘だーッ！」

「小娘」って言うなあーっ！」

なんとも立派な叫びを上げて、黒乗務員服姿の少女がこちらへ歩いてきた。

彼女の名はローレ・レランクル。何度も名前を思い出した気がするが、覚えにくい名前なのも悪いと思った。

「悪い悪い、賊の狙いを探ってたら、どうやら君がローレそうらしくて」
悪気を含まぬ返事で返した。

「今さらつと怖いコトを……ああもう、ウエルフさんと関わるとロクな目に……」

乱暴に頭を搔くローレ。少し悪気を感じてしまった私が出た。
まあ、彼女は無事だったのだ。少し安心した面もありつつ。

「それで？ 本当に付いて来るの？」

心底面倒そうに私が言う。

「ああ、もちろん。お客さんの面倒を見張る、それが乗務員の務めだからね」

乗務員ローレが皮肉を言うように呟く。

妹に見えても姉には見えぬ顔はいつ見たことか。

「ああ、あああ……ひどい、ひどすぎる――」

少女は瞳に涙を浮かべ、眼前の光景に口元を覆った。

「四号車は無事通過……と」

医師エンヴの手記を持ち、私は借りた彼の筆でそう書き入れた。
四号車では誰とも話せなかった。

「そんな、どうして、どうして——ッ！」

少女は顔に怒りを浮かべ、眼前の光景を嘆いた。

「乗務員らしき人間が複数。三号車も無事通過」

手記の残りページは二十と少し。列車の揺れで文字がふにやふにやになった。

三号車でも話せなかった。代わりに既視感を覚えた。

「なあ、ウエルフさん」

少女は顔に涙痕るいこんを浮かべ、眼前の光景に立ち止まった。

「賊らしき人間と装備が五つ、二号車同じ。……なに」

手早く記入し、インクを仕舞って右袖のピンを外す。

「——正しいって、何なのかな」

人間の頭を撫でるのは久しぶりだった。

二号車同文。足元には先端が鋭い剣になっている杖が落ちていた。

「さよなら、ローレちゃん」

一号車にて会敵。数は二人、性別は男女一人づつ。乗務員服を身に
着けていた。

「ローレ、邪——魔ッ！」

鉄球のサプレサに、今日は二度もお世話になった。

乗務員内に離反者を確認。運転手を解放した。

一号車同じ。

「ねえ、ローレ」

少女は俯いて答えない。

「さっきの答えだけど」

私は曇り空を見ていた。

「——人を救うこと。私はそれを“正しい”と思う」

空はまだ晴れない。

まだ旅は始まりだというのに。

三話 茜色の息吹

「ねーえ、ねーえってば」

間延びした声が聞こえた。けれど、反応する気は起きない。

「——いつまで、そうしてうじうじしてるのさ」

猫が作業中に邪魔をしてくるように、私の瞳を声の主人が覗き込んできた。

「……だって」

猫が毛づくろいをして言い訳を作るように、私は小さく言い訳をはいた。

「職も住処も、お金だって置いてきてたんだ」

「うん」

「私の持ち物はこの衣服だけ、挙句には取りにすら帰れない」

「確かに、違うない」

「——だったら心配なのも仕方がないだろ、お客さんよ」

声に強い感情を示してしまったことを、私は後悔した。

「そんな瞳で見つめられても、物に未練があるとは思えないんだけど」

この言葉によって、私は自分の頬を涙が伝っていた事に気がついた。

拭っても止まらない雫に気を取られているうちに、私は口を開いていた。

「……怖いんだ」

声を出すうち、私の唇は震えを覚えた。

「列車で見たあの光景の一人のように、私はなっていたかもしれない。そう考えただけで、私は——恐ろしい。死の痛みでさえ怖いのに、い

つか——」

「いつか？」

旅人に視線を合わせられて、私は口を開いた。

「あの列車の光景に、私の骸が——こうして泣きながら、浮いてしまったなら」

自分の声が掠れて聞こえる。自分でも理由が分からずに混乱を覚えた。

掠れた声がかぐもって響く。旅人が好んで着る茶コートが見えた。

「私はきつと、親の居ない私を生かしてくれたこの世界を、呪ってしまおうだろう」

「世界を呪うのは、よくないね」

旅人は言った。

「確かに世界は残酷だ。けれど、美しい面を持つ世界をぜんぶ呪うのは、また違う」

茶色のコートは丈が長く、光沢のない黒革靴が目立つ。

「ローレ、君は私に『正しい』とは何か聞いた。私は私の答えを与えた」

大人びた形だが幼そうに輝く瞳は赤く、目立たぬ鼻は薄橙、小さな口は桃の色。

「忘れてしまった子には、もう一度自己紹介をしてあげよう」

鋭い灰色の髪を撫でて、旅人は相貌そうぼうに柔らかい笑みを浮かべた。

「私はウェルフ。旅狩人であり、記憶を求める放浪者でもある。そして」

その笑みはまるで、そう、まるで——

「私は——答えを求める者に、答えと休息を与える者」

まるで、何かを悲しむような。

背の方の襟を探り、後ろ髪に手を伸ばす。私の手は一つの髪留めを探り当てた。

鳥の羽を象つた髪留めに手をかけて、私はそれを一気に引き抜く。^{からす}私の黒髪が撫でられて揺れ遊び、どこからか桜色の花びらが舞う。風が心地よく肌を撫でて、抜ける。そんな繰り返しの中、私の視界に入った黒髪に異変が起きた。

足元に向いていた毛先が風の上で踊り、ぴよんと跳ねて丁度降りてきた花びらに触れた。私の長髪は毛先から色が変わってゆき、黒髪は次第に桃色で塗り上げられていった。まるで、花びらの色が溶け出したかのように。

「うわああ、すごい」

近くで見ていた旅人が歓声を洩らす。なんともものつぱりとした声だった。

きつと私の髪の色が一気に変わったことに歓声を洩らしたのだろうが、ひよつとするとまた、遠くで跳ねていた野兎の方を向いているのかもしれない。

そんな事を考えた自分に笑みを浮かべ、私は目を開けた。

「駅員ごっこは、もうおしまい。旅人さん、旅について色々教えてよね」

少女ローレがそう言い、私の方へ腕を伸ばす。握手を交わせということらしい。

「はいはい、喜んで。ノーレちゃんが木の根につまづいて死なないように、ちゃんと見ていてあげないとね」

いつもの皮肉入りスープ……じゃなく台詞せりふを掛けると、少女は苦笑する。

「旅人さん、私は“ノーレ”じゃなくて“ローレ”だよ。発音がちよつと違うのさ」

少女がそう答え、私に向けて伸ばしていた腕を腰に当てた。

「そりゃ失敬。女の子の名前は間違えてあげちゃだめだね」

私はそう言つて、両手を横にして持ち上げて見せた。

あ、これだ。いつもの私の調子が出たような気がして、私も軽く微笑んだ。

「それなら、改めて。——ウエルフさん、街を追われた私の旅の道案内、よろしく」

改めて腕を伸ばされ、右手が私の前に現れる。

私はそれをしっかりと掴み、言った。

「よろしく、ローレ。君との旅に、喜びと美味しい食事があるように」

ローレと握手を交わした場所を下に見て、私達二人は駅のホームへ上がって来ていた。切符代わりの銀板をくるくる回しながら、天井を支える柱に寄りかかりながら。

この『汽笛の町モリ』の駅へと列車が着いた時、私達はすでに列車を降り、駅の壁の裏手に回っていた。握手を交わした場所もそこだ。

その後は駅を壁伝いに進み、私達は町の中へ入り込んだ。町商店を巡って調達したものは、体を丸ごと包める黒コートが二つと干し柿の

菓子を少々。

ついでにお面を二つ調達した。コートの内側から着用すると、視界は狭まるがどこか接しがたい雰囲気が浮いた。完璧である。

そして今。もう一度駅の裏手を進み、停車していた列車に乗り込んだ。

車両の間に繋がっているテラスから乗り込む訳だから、誰かに見られてはいけなかった。無事乗り込めた時には二人共に汗をかいていて、一度お面を外す事になった。

「賊に襲われて死者多数、ってな具合か」

「ああ、予定通りだな。しっかしやりすぎだろ。前方車両は殆ど全滅だぞ」

二人の従業員の声が聞こえる。柱越しでも聞こえるような声でそんな事を言えるのは、このホームがすでに封鎖されていて、従業員達も乗客が残っていない事を確認したかららしい。

無論、ホーム外から戻った私達には関係のないことだ。

お話、丸聞こえですよ。と言ってやりたい。言わないけど。

「そうだ、そこなんだよ。事前に件の列車くだんが来るってのは分かったことだから良いが、姿を見た客を口封じに片っ端から、ってのがな。無駄な噂が広まらないように、って思惑らしいが……」

脇に立っていたローレが肩を震わせはじめた。私は左手を肩に乗せてやった。

従業員達はなおも会話を続ける。

「無駄な噂が広まらないように、って思惑らしいが……それと、もうひとつ」

「賊が気絶させられていた」っての难道？ 俺もそこが不可思議だと感じたんだ」

脇に立っていたローレが、私に向かって黄色い狐のお面を見せてくる。背丈の差があり、丁度私を見上げる形だ。

従業員の一人は続ける。

「そうそう、しかも」必ず一本は脚の骨を折られて、な」

言葉が聞こえてきた直後、ローレは顔を左右に動かして私の方を何度も見返した。

「まさか、私が彼らを殺したとでも思っていたのだろうか？」

「奇怪だよな。しかも中でも……何だ、『墓地掘り』の二つ名で呼ばれてた奴。そいつは両足の脛を打ち砕かれて——」

「あっおい、もう時間だぞ。緊急収集だとかで呼ばれてた。急げ」
二人の従業員が足音を立てて、足音は段々と小さくなっていった。

「旅人さん、今の話は——？」

少女ローレが訊いてきた。頃合いを見計らったらしい。

訊かれれば答える他なしと思い、私は蒸れたお面を軽く上げた。

「仕方ないじゃん。私の武器は『人を救う』ためのもの、もとい力なのだし」

少女ローレもお面を持ち上げた。暑そうに空を仰ぎ、小さな額から汗が垂れる。

「旅人さん、峰打ちで賊を捌いていたの……？ あ、あの状況で？」

「峰打ちって、刃物じゃないんだから……」

軽く呆れた声を返す。しかし、少女の表情には変わらず驚きの雰囲気
気が浮かんでいた。本気で驚かれているらしい。

「でもでも、私達二人は賊達に顔が割れている訳だし——」

あー、面倒な事になってきた気がする……。

ということ、私は話の流れを一旦逸らすことにした。

「あ」

「あ」!? ちょっと旅人さん、何も考えてなかった訳じゃあないよね!？」

予想通り、少女ローレが驚く声を上げた。

「あ」あ、それね。大丈夫、私達の情報は広まってないよ。なんてっ

たつて——」

そこで言葉を区切り、私はお面を被り直しながら言った。

「あいつらはもう、12歳より後の記憶を食べられちゃったからね。サプレサに」

部屋の真ん中に煙の柱が立ち、じゅうじゅうという音が充満していた。鼻と食欲をそそる香ばしい匂いがして、赤かった肉が良い焦げ目をつけていく。

今まさに、私は、五感全てを使って食事を楽しんでいた。

「おふあああ……！ たまらん、まったくたまらんね、こりやあ！」
今日の昼食は羊肉を焼いたものだった。がしかし、いつもとは一味違う。

「まさかこんな場所で、純粋な羊肉を贅沢に頂ける店が出ているとはあ……っ！」

大きな金網の上で火花が舞い、その上に乗せられた大きな肉がじつくりと焼かれていた。幅は顔一つ分くらいはありそうな大きさで、火が通り切るか通り切らないか、という厚さの肉だった。

「は、はは……。すごい……」

若干の気後れを見せるローレ。その目の前で、私は頃合いを見て肉に刃を入れる。

この店に入ってまず驚いたのは、この店には“椅子”がないことだった。鉄板が据え付けられた机の脇には枕のようなものが敷かれていて、そこに座って食事をするらしい。その次の驚きは言わずもがな、この大きな肉の登場に対してだった。

ローレの髪は皮製の輪っかでもとめられていた。つい先ほど道端で買ったものだ。桃色に染まる髪が腰のあたりまで伸びていて、脇の

窓から入る風に揺れていた。

常に短髪な私にとっては少し興味があつたが、先程全部持っていかれたところだ。

「おお、おおおっ！ いい具合に焼けてる！」

滴った肉汁に炎が騒めき、ローレが驚いたように両目を瞑ってみせた。

「あち、あち」

視界の奥では、よくよく熱せられた肉にローレが苦戦を強いられていた。

「猫舌なの？」

がぶつと一口に肉を頬張つたところを見謀り、質問してみる。

「ひがう！ ひょうひゃはい！」

もはや意味の断片も伝わらない声が返ってきた。

「それで、どう？ 美味しい？」

「ふまい！」

間髪開けず、嬉しい返事が返ってきた。

私も一口、大きな肉にかぶりつく。

「ほう？」

「ひょーふまいー！」

その後、パンのおかわりを頼んだ。

四話前編 夕暮れの匂いのする街

「それで？ 次はどこに行くつもりなの？」

少女が訊いてくる。彼女の名はローレ。訳あって私の旅に同行している。

彼女の服装は薄手の茶コート。先から着ていた黒コートは暑いと言うものだから、この先の為を考えてもう一着買ってやった。

「肉屋から出てすぐ 何なんだけれど、この町のパンは美味しい。だからこの道を北へ」

私は真面目な顔をして言う。

「まだ入るの？ あれだけ大きな肉を食らっておいて……」

少女は軽蔑を込めて目を細めてきた。

「よく言うでしょ、別腹べつはらってやつだよ」

かくして、私ウエルフは『汽笛の町モリ』中央街の敷きタイルを踏みしめた。

地面には四角に整形された石が敷かれている。整備された道を馬車が行く。

「そんなお金どこに——ああもうっ、私は先が不安だよ旅人さん！」

少女が私の先行に気付いて走り出し、私の側にぴたりと着いて歩き出す。

彼女の声に不安の色は見えなかった。それだけで私は安心して、薄く微笑んだ。

時は昼頃、食べて飲んで楽しむ声が良い響きを奏でる頃だった。

がしやん！ ぱりん！ そう食器が割れる音が聞こえる。
ちやうど大通りらしい道を通っていた時のことだ。

「いだっ!？」

道端に並ぶとある酒場で、大柄な男のお尻が落ちる。

驚いたその男は乱暴に手を動かして脇の柵を掴み、柵の一階がば

きつと音を立てて折れた。

「がはははは、何やってんだ！」

隠す気もない大声で、尻餅しりもちをついた男の脇に座っていた男が笑い出した。

「いたつ！ 何すんだよ、てめえ！」

ついでとらしく、笑っていた男の腕が尻餅男の頭を叩くと共に。

「はははは！ ダッセえ転び方すんな、グレン！」

「飯と年食い過ぎて足が逝ちちまったってな！」

「それで赤子足に逆戻りってか！」

「いえてら！ がははははは！」

店の奥側から複数の声が聞こえてくる。どの声も遠慮のない大きな声だった。

「うるさいなあ、街並みの良い景色がだいなしだ」

よろよろと立ち上がる尻餅男の方を見ながら私は呟く。

道幅は馬車一台と人二人分くらい。あまり広いとは言えなかった。道端に飲食店のテラスや受付台が迫り出しているので尚更だったが、それが逆に良かった。

屋根を伝って靡く洗濯服、馬車が苦渋して迂回する程の人混み、薄い赤色の入った異国の家々。相まった景色は見ていてわくわくするものだった。

町人は皆頭みなに布を巻いて背中に流していて、服は麻布あさぬのを染めてできたものが多い。

異国の風吹く道を眺められる。これが良い景色でなくて何がそれだ。

「完全に酔ってるね、あそこの客さん方……。何か鬱憤うつげんでも晴らしに来たのかな？」

ローレが言う。気圧されたような顔をして。

「鬱憤、ねえ。あんな大酒飲みにしては、毎日が鬱憤だらけ——」

「なあーにやっってるんだい！」

鋭い怒号が響き、道行く人々の視線が声のした方向を向く。

あまりの音量に私は肩を竦め、ローレは私の背後に体を隠す。ただただ静寂だけが残っていた。

「げ」

壊した棚から手を離し、地べたに転げた男性が呟いた。

直後、店の奥から大柄な人影が現れる。

大柄な人影の性別は女性で、背丈を腹部の周囲にあてたような体軀をしている。歳はそう若く無さそうに見えるが、簡単には老いそうにない丈夫さを感じられた。女性相手に“丈夫そう”だなんて表現は失礼だろうが、そんな感じだ。

健康そうな色をした太い腕には美味しそうな食事を乗せたトレイが掴まれている。

「何寝ぼけた顔で『げ』だよ、騒々しい！家で女房に語りやいい！昔話でも！」

予想通りの根太い声が響いた。声の主はこの女性だったらしい。

あらやだ、“根太い”だなんて野蛮な表現ですこと！

ぴったりの表現だった事は否定できないことは内緒だ。

「そ、そうは言ってもよう。女房はさつき出てったし、いても変わらな

——」

萎縮したような声で男性が言う。その声を遮るように女性が手を持ち上げた。

ばん！ という音が響き、騒がしい男衆の卓でトレイが悲鳴を上げる。

幸いにもその食事は熱々のスープではなかったが、乗っていたパンは宙に浮いた。

「女に逃げられてヤケ酒かつ食らいに来たってのかい!? 早く追っかけなよ！」

問いただされている男はもとより、騒がしかった卓の男たちもすっかり静かになってしまっている。傍から見ているローレが出てこれ

ない程の迫力なのだ。私が彼らに薄い同情を覚えてしまう程。

「元氣な女店主さんだねえ、ローレ？」

私は背後に声を掛けてみた。

「……ごめん、旅人さん。今だけ、今だけでいいから隠れさせて」

不覺そうな弱弱しい声が返ってきた。これには流石の私も苦笑いを隠せない。

「何を怖がってるのさ——」

私がそう呟く一瞬前、ヤケ酒を食らっていた男がこう言った。

「だって、面倒だし……」

次の瞬間の風景が予想できてしまった。

「はああっ!?! ツぎけんじやないよ! 女房まで失ったら馬鹿騒ぎしかしないあんたに何が残るってのさ!」

声は壁を震わせることができる事を知った。

出処の気になる声量の声が壁を震わせる。ついでに人の心も震わせ、静かになった道をまっすぐに抜けていった。

背後のローレが抑えた悲鳴を洩らしたことは言うまでもない。

「で、でも——」

「何やってるんだい! さっさと引き留めに行くんだよ!」

「もう故郷への道に着いて——」

「走れ! ぐだぐだ言っていないで走らんかいッ!」

「は、はあいっ!」

嵐が去った街には騒めきが戻り、立ち止まっていた人々も移動を再開した。

かの男衆の卓では会話が残っているが、その声量はすっかり収まっていた。苦笑いを通り越して笑いを堪えていた私がいたことを憶えている。

「も、もう行った……?」

少女ローレの声が聞こえる。いつもの冷静さが怯えに取って代わった声が聞こえ、私はついに笑い出してしまう。

「くくっ……だ、だいじょうぶ、もう行ったよ——ぷくくくっ」

「なあっ! 何笑ってるのさ!」

ローレの頬が真っ赤に染まった。しかし私の笑いは止まらない。

「べべ、べつに、ね。ほら、今日の宿を探さなきゃ」

気紛れに話題を逸らし、私は空を指さして言った。

空はもう赤を白に薄められた色を見せていて、道に通る人々の中には灯を手に持っている者も見えてきた。陽はすぐに落ちてしまうだろう。

「空もローレの頬みたいな色になってきたし」

あえて真顔でそう言ってやった。

「く、くうう……」

なんとも言えない顔が返ってきた。

悔しそうな声を洩らす少女から視線を逸らし、私は道の先の方を向く。

「さ、今日の宿を探そうか。行くよ」

「……どうせ、夕食が美味しそうな宿に泊まるんでしょ?」

道を進み、私は金属製の箱を取り出した。

箱の脇についた板を噛んで引き、片手でとある枝を取り出して着火。どちらも前の街で手に入れた新品だった。

「半分正解。今日はパンな気分だから、パン屋が近いといいな」

私は本心でそう言う。

「へいへい、さいですか。それで? その箱と枝は何?」

少女は後者の方に興味を示してそう言ってきた。

「確か、『ライター』と『枝マッチ』。どっかの不作法な街で買った」

私は薄い皮肉を込めてそう言った。

「不作法な言い方ね。それと、上手い事は言えてないから」

街道は灯に染まりつつ。

「いらっしやい！ 何かお求めかしら？」

健康そうな肉付きの女性がいる店を見つけた。

「こんばんは。ここにパン屋さん？」

少女ローレが口を開いた。両手をカウンターの縁に乗せつつ。

「ええそうよ。……あら？ もしやお一人で旅をしているの？ お嬢

ちゃん」

優しくそうな微笑みを湛え、カウンターに立つ女性は返答した。

ちなみに、彼女の表情は被られたコートに遮られて見えない。前が開いたフードを被られているので、女性からは見えるが私からは窺えなかった。

「いえ、連れが後ろに——ああっ！ もう、何やってたのさウエルフさん！」

くう、見つかってしまった。もう少し気付かないでいればいいものを。

その店で買った『クラツカー』なるおもちゃを使ったかったのだが、あと数歩というところで感付かれました。仕方ない、今回は期を窺ってやることにしよう。

「いや、すまんね。長パン四つで」

私もカウンターに顔を出し、女性が見せてくれた品書きを見て注文する。

「そんなに食べられないでしょ！ ごめんなさい、二つでいいです」脇から聞いていた少女に訂正されてしまった。

「ええ。別腹はあ？」

「私は満腹なの！ あと別腹は減らない物じゃないからっ！」

私とローレの会話に軽く笑い、女性が口を開く。

「うふふ、仲が良いのね。長パン二つでいいかしら？」

「ええ、それでお願いしま——」

ローレが口を開く。その言葉をあえて遮り、私は口を開いた。

「あ、あと。部屋を一泊貸してくれませんか」

「へ？」

間の抜けた声と視線が集まった。

パン屋の宿主は、快くも客人用のそれを一部屋貸してくれた。

代金は800バニとそこそこな値段だ。そこらの宿賃よりは安いので構わない。

「くああ……」

口に手を当ててあくびを一つ。今日は食べてばかりだったので、十分幸せではあるが、今になって眠気に襲われることになった。

「寝不足？ ウェルフさん」

借りた肩掛けに乗務員服をかけたつ、ローレが声をかけてくれる。

そういえば彼女は乗務員だったか。今日の朝までだけど。私はそう思い出した。

「うん。今日はよく動いたし、よく食べたからね」

「本当、食べすぐ……ふああ」

「あ、うつつた」

留守を少女ローレに任せ、私は夜の街へ出た。既に多くの商店が並んでいる。

買った物は三種類。ふかふかした重ね布を四枚、固めの毛が刺された棒を二本、

それと柔らかい生地のを二枚。ただただ眠かった記憶がある。

「ただいま」

部屋に戻った時、部屋の入り口で焚かれていた灯は消えていた。ローレは寝床に横になり、穏やかな寝息を立てている。起こさぬよう、静かに移動を始めると、

「旅人さん」

一瞬で気付かれてしまった。

「何？」

「――ありがとう」

そうとだけ言い、少女は寝返りを打った。

「ウエルフ、でいいよ」

それは、晴れた夜空が見える日のことだった。

とある街道での筆記

私の名前を呼ぶ声がした。年若そうな、高い音が響く声だった。

「なんだい？ お嬢ちゃん」

声に気付いて足を止めた私は、声の主の方を向き直っていた。

「お嬢ちゃんと呼ばれると、少し、こそばゆい感じがするな」

そこには貴族服を着た少女が立っていた。衣服には赤い縦縞模様が入っていて、少女の髪の間にも、一本か二本の赤い線の布が揺れていた。

「……どこかで？」

私はただただ、少女のその言葉に戸惑っていたが。

「ああ。君と私とは一度会っている。——君は覚えていなくとも、ね」
背筋にぞわりとした何かを感じた、という事を憶えている。

「それで、何か？」

「最近の君の様子が気になってね。元気にやっているかい？」

私が少女に短く問うと、少女はすぐに質問を返してきた。少女の頭が、少女から見て右前の方向にゆっくりと傾げられる。

「ええ、まあ。あまり変わりなく」

私は曖昧な返答を返す。

「そうか。それは良かった」

少女は簡潔な返答を返した。

「さて、お喋りはこのくらいにしようか。本題に入ろう」

少女が静かな動作で瞼を閉じる。傾げられた頭をそのままに。

「本題、ですか。長話は苦手なもので」

私は片方の広角をあげて呟いた。

「そう言わないでくれ。簡単な質問だから、きつとすぐ終わるさ」
少女もにやりと笑って言った。

吹雪に見舞われたとして、動けなくなる事がないようにする方法。

それは、動き続けることだ。じつとするとして、吹雪の入ってこない屋内で暖かいお茶を頂く時までには待つ必要がある。

私が動けなかったのも、動かなかったからなのかもしれない、と思った。

少女は言った。

「君は狼だが、同じ狩人としての鷹の爪を隠しているかな？」

なおも少女は続けて言う。

「君に力を与えたのは、他の人の希望となるように、だ。それを忘れたわけではあるまい？」

「ち、力だとか何だとかは分からないけど……」

少女の言葉に対して、私は無意識に口を開いていた。

「けど？」

少女が問う。再び私は答えを返した。

「――私のこの力は、罪のない命のために使っている」

自分でも不思議な断言に対し、少女が更に口角を上げた。

「へえ、罪のない命、ねえ」

その表情は鞠を叩く猫のように穏やかで、好奇心が浮いていて、どこか問い質される感じがした。赤い布の流れる白髪が靡くたびに、私は次の言葉を失った。

「でも、君にあげた力は、小さなペンダント」を象っていたはずだ。そんなおもちゃみたいな物持っていたら、逆に侮られると思うけどね」

ここで私は過去の記憶を探り出そうとしていた。そのことは憶えているが、得たい記憶を見つけ出したか、あるいは見つからぬままか、それも憶えていない。

最後に一言、少女はこう言っていた。

「人は自^{おの}ずと外見で力量を測ってしまう。爪を見せるならば、よく用心する事だね」

記憶はここで途切れていた。思い出そうと考えてはいるけれど、記憶の尾っぽにも触れられなそうだ。

故に今、今思い出した記憶をここに書き記しておく。

いつかいつか、私の記憶が全て蘇る時を願いつつ。

四話後編 雷鳴の刻、街道にて

「目を開くと、そこは見覚えのある天井だった」

「何言ってるのさ」

今日の予定を考えながら、私はベッドの上でごろごろしていた。

「で？ 今日は何をするの？」

少女ローレが聞いてきた。今日の服装は無地の服、私が昨晚買ったものだ。

「買い物と、聞き込み。この町の噂でも聞ければいいかなって」

私が言う。

「とうとう？」

少女が問う。

「一つ、思い出したことがあるんだ。——けれど、紙とペンは切らしてて」

「へえ。で、聞き込みのほうは？」

間髪入れず、少女が聞いてきた。

「失った記憶が恋しくなってきた、から。取り戻す方法が知りたい」
窓の外から、嗅ぐとお腹が空く匂いが入ってきた。ミルク入りシチューだろうか？

「それと、さっきの話だけど」

部屋の鍵を閉めつつ、私は壁に向かって呟いた。

「ん？ 何？」

「さっきのことだけど、買い物についてはどうでもよかったの？」

脚が隠れる乗務員服と、安っぽい白の上着。これが今日の少女の服装。
質も価格もばらばらだったが、意外と良く似合っている。明日は休

日だ！ とはりきる作業員に似ていた。

「旅人さんの思い付きだもの、哲学みたいな話をされてもねえ」

なぜか呆れ顔で言われた。

「失礼な」

「あ、そうだ。朝ご飯は先に取っていい？」

開店前のパン屋から出て、私は少女に聞いた。

「だめ。お客さんは食べすぎるから、湯船に浸かったら寝ちやうでしよ」

「し、失礼な」

そう。私たちはこれから、この町の風呂屋に行くつもりだったのだ。

先に腹ごしらえでも思っただけだ。

「……お風呂に入れば、きつとお腹も空くよ。美味しく食べるために我慢して」

「へいへい、分かりましたよ。諦めます諦めます」

道の先にいた少女の方へ、私は減った腹をさすりつつ歩き出す。

どうも、二人旅というものはめんどうだ。

軽く笑みがこぼれた。

道を進むように、月と太陽が空に浮かんでいた。

二色に染まり上がった青空を見上げ、その先を見据えるように。

「ふひー、はらへった……」

汗を拭いつつ、私は風呂屋から出て呟いた。

時刻は早朝過ぎ、月が輝く夜空が浮かぶ刻。

この刻の風は街道を吹き抜け進み、私の頬を撫でて抜けていった。

「うん、良いお湯だった。ありがとう」

背後に声を感じる。

あくびに手を当てて目を開くと、視界の左脇からローレが顔を出した。

「そりやよかった」

私は小さく返答し、少女に振り向いて小さな瓶を渡す。中身は冷えたミルクだ。

「さて、じゃあ朝ご飯でも——」

少女がそう呟き、小さな靴が歩を進める。

この時間が妙に長く感じた直後、私は頬に火の粉が触れるような感覚を憶えた。

少女の靴が地に着いた瞬間だった。何かが来る予感が走ったのだ。

「——来る」

「へ？ どうしたの、旅人さん？」

少女は感じなかったようで疑問の声を発するが、私は街道から周囲を見渡した。

「何か、嫌な予感がする。不穩でいて奇妙な何か——」

操られるように言葉を発する私。少女はただ不思議そうな顔をしていた。

「不穩で奇妙……大嵐でも来るのかねえ？」

呑気な声で呟きつつ、少女は瓶を傾けてミルクを飲んだ。ぷはーという声が聞こえる。

「大嵐なら……良かったんだろう」

——旅人はそう呟いて、少女を包むように抱き締めた。

天という天が裂け、点々とした雲に丸い穴ができた。

響く音が大地を揺り動かし、浸されたガラスの割れる音が聞こえる。

耳さえも拒むような破裂音が轟いて、薄く開いた瞳には光の柱が立っていた。

空は深く黒い雲に覆われつつあり、私は視界に入る景色に目を疑う。何本もの雷が街道を襲い、また草木を襲っていたのだ。

雷が止んだ時、周囲は暗闇に包まれていた。悲鳴も聞こえず、ただ雨の音だけが響いている。

足を動かすと“ちやり”という音が聞こえて、ミルクの入っていた瓶が割れていた。

腕を広げると、呆けた顔の少女が私の方を見上げていた。

「……何が、起きたの？」

そうとだけ呟いて。

「分からない。急に大きな雷雲がやってきて、雷を落としていった」

私は簡潔にそう呟いた。

降り続く雨に包まれて視界は悪いままだ。道の先も暗いままで、うすぼんやりと灯の光が浮かんでいる。

雨が続けているので発火は起きていないが、天井が打ち砕かれている建物が確認できた。中にいた人は——雨に打たれているだけならば良いのだが。

髪を撫でる雨に顔をしかめてから、私は口を開いた。

「道を進んでみようか。泊めてくれたパン屋の人が気掛かりだ」

「ええっ!?! でも、また嵐に襲われたらっ! 雨が止むのを待てば——」

少女が私の手を取る。歩がぶれて体制を崩した私は、あと一步で転びそうになる。

「どっで待って言うのやっ?」

背後を振り向いた少女は、きつと気が付いたんだろう。

屋根が抜け落ち、ただ雨に打たれるだけの風呂屋の姿を。

雷に打たれては居ないはずだが、確かに風呂屋は倒壊していた。その事実は何よりも信頼できて、少しの不安を私に感じさせたが、私は前に進むことを決めた。

「これ、もう……旅人さん、何かに呪われた記憶はないの？」

私の脇に立って歩き出した少女が呟いた。その顔はこちらは向いていない。

「——ようこそ、不運な旅人の生活へ。毎日三食衣服つき、奇妙な旅路をあなたに」

「そりゃいいね、気に入った。是非とも老後に楽しみたいものだよ、旅人さん」

旅人と少女はおのおの、また同じ方向へ、暗闇へと歩を進めた。

暗い道を進むのは、もう一人きりではない。

周囲を何かが走り抜ける気配がして、私は幾度となく視線を動かした。しかし何もいない、という事を幾度も繰り返した。

自分では分からないが——自分は、恐怖しているのだろうか？

「ねえ、旅人さん。……怖い？」

少女が私の服を掴んだのは、私がそう考えていた時だった。

道の先から雨水を踏む音が聞こえて、それは今も近付いてきている。しかし、私も気配は感じられなかった。——やはり、恐怖が幻の何者かを見せているのだろうか。

「——いいや、平気だよ。……大丈夫」

暗闇に人影が浮かび、雨が頭の中に振るように音を鳴らす。少女ローレは動こうとしなかった。

現れたのは二人の人間だった。年老いた男性が一人、若い外見の男の子が一人。

二人の足取りは安定していて、外見からすると無傷のように見えた。無論、雨水でびっしょり濡れているはずだが。

「む、人か？」

老人の声が聞こえ、ローレが軽く安堵の息を洩らす。老人は続けた。

「おお、やっぱり人じゃったか。無事だったようじゃな」

「おはようございます。町人の方ですか？」

ローレが返答し、老人が私達の方に近付いた。暗闇の中、二人の表情が窺えるようになる。

老人の表情は“笑顔”だった。きつとかなり前向きな人なんだろう。また右手には木製の杖が、左手には男の子の手が握られていた。髪の毛や髭は全て白色だ。

そして男の子の表情についてだが……“無表情”だった、とても言うおうか。

視線は前に向けられているが、少年の視線は合っていない。力が入らないのか腕を垂らし、水を吸った髪を額に張り付けていた。

「——っ!？」

男の子の表情を見たのか、少女ローレが口元を覆った。彼女が何を感じたのかは分からないが、私は老人の方を向き直った。

老人は言う。

「ああ、そうじゃよ。……む、知らぬ顔じゃな。旅人さんかの？」

「ええ。先日からね」

私は答えた。

「そうじゃったか。ゆっくりしていくとよいぞ、旅人さん。まあ、こんな大雨じゃ宿る場所が少ないじゃろうが」

老人が朗らかに笑って見せる。どこか違和感のある会話だった。

私は続ける。

「それで、何をしていたんです?」

老人は答えた。

「孫と散歩をしていたんじやが、予定ができたものでな」

「——予定って?」

少女ローレが口を開き、老人が返した。

「この大雨じや町の人も苦勞するじやろうてな。一つ儂が止めてやろうとな」

「どうやって?」

老人は、答えられた。

「生贄を捧げて、な」

あらぬ方向に向いた視線を見せ、老人は更に笑みを浮かべた。

「おじいさん、若返るとしたら——何歳に戻りたい?」

私は手を動かしつつ、そう訊いた。

「む? そうじやな……わしなら、20歳くらいじやろか」

「そっか。——じゃあ、そのまま死なないで戻れるといいね」

ローレが軽く目を瞑り、私は右手を少し引く。

「なんのことじや?」

「……戻ったら、少しは狂気も隠せるようになると良いねってことさ」

老人は一番の笑みを浮かべた。

老人の生死は確認できなかった。

鉄球のサプレサが彼の寿命を呑んだ後、彼の姿は消え去ってしまったのだから。

その後、雨は止み、次第に空は晴れていった。

「目標、消えた老人の行方を調べる……と」
「私はメモにそう書き記した。」